



[本文監修:南九州歴史学会 画:KENRO]

明治維新150周年企画

かごしま

ISHIN物語

明治維新がもたらしたさまざまな変化を
分野ごとにご紹介します。

第4話 薩摩の教育と医学

英国に渡り多くを学んだ薩摩藩英国留学生、英国人医師
ウィリアム・ウィリスによる近代医療の発展。薩摩と英国の
結びつきは、日本の近代化を大きく進めました。

積極的な国内外での留学

薩摩藩第8代藩主島津重豪は、鹿児島城の眼前に、藩校・造士館と医学館を設立。教育や医学の発展の基礎を築きました。その重豪の影響を強く受けたのが第11代藩主斉彬です。

斉彬は「郷中教育」にこれまで以上に力を入れるとともに、藩士を長崎や大坂、江戸などに積極的に留学させ

るなど、教育制度の充実を図ります。さらに、藩内から選んだ人材を琉球経由でヨーロッパにひそかに留学させる計画を立てますが、斉彬の急死により白紙となりました。

斉彬の亡き後、その計画は「薩摩藩英国留学生」として実現することになります。使節と留学生あわせて19名が、生麦事件や薩英戦争を経て友好関係を築いた英国に2カ月かけて渡航。途中、

医学の発展へ導いた英国医師

寄港した香港のガス灯で彩られた街並みやスエズーアレクサンドリア間で乗車した蒸気機関車など、西洋の技術の高さを目の当たりにした彼らは、それぞれがロンドン大学などで科学や歴史など専門的な分野を学ぶこととなります。

留学生の1人、森有礼は友人に宛てた手紙に「古い考え方などに縛られた『汚魂を洗濯』し、大局を見極める視野と判断力を備えていきたい」と書き綴っています。森はその後渡米し、見聞を広めながら、米国の教育制度を学びました。帰国後、明治政府で働きながら、一橋大学の前身・商法講習所を設立。さらに初代文部大臣に

就任し、教員の養成機関や学校制度の整備など、近代教育の基礎を築きました。

薩摩藩英国留学生が英国に渡る前年、横浜に薬局を設立した英国人がいます。生麦事件の検死や薩英戦争の負傷者治療をおこなったウィリアム・ウィリスです。彼は英国公使パークスとともに鹿児島を訪問したこと

や、薩英交流が縁で、戊辰戦争の際、薩摩藩の野戦病院で西郷隆盛の弟・従道をはじめとする負傷者の治療にあたりました。銃弾摘出や

麻酔を用いた手術などで西洋医学の技術の高さを多くの人々に知らしめます。戦後、西郷の求めに応じて鹿児島島に赴き、鹿児島医学学校長兼病院長に就任。外科、内科、産科、眼科などが設置され、最先端の医療機器を備えたこの施設には藩外からも学びに来る人がいました。

薩摩藩置県で鹿児島県になった

後も同地で活躍し、西南戦争により鹿児島を離れるまで鹿児島島の近代医学の発展に心血を注ぎました。

また、ウィリスは鹿児島医学校で、東京慈恵会医科大学の前身・成医会講習所を創設し、日本初の医学博士となった高木兼寛など、多くの医師たちを輩出しています。

民衆の健康に高い関心をもち、藩内各地に病院を建てようと計画していた斉彬。彼の進取の精神は、彼の死後も、藩内の多くの若者に受け継がれていきました。そのような素地の上に、ウィリスが西洋医学の高い

技術を持ち込んで鹿児島医学学校の学生たちに指導したことで、明治維新後、鹿児島島の医学は進歩していったのでしよう。

登場人物



初代文部大臣
森有礼
Arinori Mori

第一次伊藤博文内閣で初代文部大臣に就任。学校令を制定するなど教育制度の確立に尽力しますが、進歩的な性格が誤解を招き、大日本帝国憲法発布式典の当日、国粹主義者の襲撃に遭い、短い生涯を閉じました。



西洋医学を広めた医師
ウィリアム・ウィリス
William Willis

鹿児島医学学校の初代校長を務め、鹿児島島の近代医学の発展に尽力した英国出身の医師。斉彬の側近だった江夏十郎の娘・八重と結婚します。身長は190cm、体重も100kg以上あったと言われます。

維新紀行

記念碑

現代まで続く
近代医療開拓の証

鹿児島医学学校の流れをくむのが鹿児島大学医学部です。そのため、大学キャンパス内にある鶴陵会館の中庭には、ウィリアム・ウィリスのレリーフが掲げられています。医学部のホールも、ウィリスの功績を偲んで「ウィリアム・ウィリス・ホール」と名付けられています。



今回は 薩摩の芸術と文化